

145号住宅瑕疵保責任保険

1. 住宅瑕疵保責任保険とは、

住宅瑕疵担保履行法により、平成21年10月1日以降に新築住宅を引き渡す場合、新築住宅の建設を請け負う建設業者及び宅地建物取引業者は、住宅瑕疵担保履行法に基づく10年間の瑕疵保責任（無料修理を行う責任）を果たすために、必要な資力を「保険の加入」又は「保証金の供託」により確保することが必要となる。任意保険もあり。

2. 対象業者 宅建業者、建設業者

3. 保険期間 引渡しの日から10年間

4. 保険の対象

住宅品質確保促進法に基づく定められた構造耐力上主要部分および、雨水の浸入を防止する部分に関する責任の範囲が対象となる。

品確法とは、以下の通りである

①瑕疵担保責任 10年間 ②住宅性能表示制度 ③紛争処理機関の設置

住宅瑕疵担保履行法とは

5. 住宅品質確保促進法・（品確法）とは 定められた構造耐力上主要部分および雨水の浸入を防止する部分に関する責任の範囲が対象となる。品確法ではカバーしきれない部分例えば、雨水の浸入を防止する部分に関する10年間の瑕疵担保責任の範囲が対象となる

平たく言えば、**品確法プラス雨漏り保険**である。

保険限度額

一戸建て 基本契約 2000万円まで **オプションあり**

共同住宅 基本契約 2000万円プラス保存戸数 限度額30億円

保険料 標準料金＝保険料＋現場検査手数料 一戸当たり

延べ床面積	保険料	現場検査料	合計
100m ² 未満	38,800	10,090	48,890
100～125	45,600	11,660	106,150
125～150	59,420	14,810	74,320
150以上	82,370	19,540	176,140

まとめ

- ・全国どこでも建築確認・性能評価との同時申し込み可能
- ・住宅構造耐力主要部分及び雨水の浸入を防止する部分が対象
- ・全ての新築住宅
- ・事業者倒産時でも対応、保険金が支払われる
- ・平成21年10月以降に引き渡される新築住宅が対象

保険加入又は、供託金が必要 財団法人 住宅保証機構資料参照

146号天地人の里 米沢ー1

NHK大河ドラマ「天地人」の主人公直江兼継は、上杉家に仕え、上杉謙信亡き後、後継者上杉景勝を主君として盛りたて、とかく、利に走る戦国武将のなか、主家のため、領民のため、家族のため、愛と義を貫きとおした戦国武将として、只今、人気ナンバーワンである。4月の下旬、上杉家ゆかりの地、山形県米沢市を訪ねた。米沢市は、もともと私の第二の故郷だ。私の父であり細田木材の創業者細田三郎は、第二次大戦中、原木確保のために、米沢市に支店を構え、口田沢大字田沢在住の伊藤倉蔵氏を支店長重役として迎え、羽前杉丸太を集荷し、米沢の在、羽前小松駅から貨車積みで、錦糸町駅、又は小名木川駅留め搬送、両駅から筏組して、千石町の河岸につけた。一時期かなりの数量の羽前杉を製材し、国のお役になったと父から聞いている。羽前小松駅は、鉄道と、街道の分岐点であり、物資の集散地として賑わった地域である。駅前の米屋という割烹旅館は、家内の姉、菊池幸子の主人菊地昭一郎の生家である。私の家内は米沢市の絹織物工場の三女だ。先ほどの米沢支店長伊藤倉蔵氏の仲人もらった縁である。その上、大戦中には、伊藤倉蔵氏の世話で、田沢の蚕小屋を借りて、祖母、母、妹、弟が終戦までお世話になった。私は、当時小学校6年生、戦火が激しくなり、疎開先の気賀の危なくなり、私もいったん田沢の蚕小屋から、田沢の小学校にわずかな期間通学した記憶がある。このように、米沢市は、私にとって二重三重の縁が深い地域である。このようにゆかりのある米沢市がこのたび、NHK大河ドラマ「天地人」として取り上げられたことは、誠に喜ばしい限りである。このたびの米沢行きは、今までに無い感動を覚え、感銘を受けた次第である。そこで、御館の乱、景勝上杉家の跡取りとなるなどのことは、テレビでご存知のはずなので、次号でテレビにでない米沢市と上杉家のことについてご紹介したい。続く

米沢市は、四方山に囲まれた盆地冬は雪に閉ざされ、経済活動は半減する。夏は、四方山に囲まれた盆地のため、風、一つない夕方の暑さは、雪国と思えないほどのものだ。人口9万人の小都市、産業といえば、戦後、輸出振興策と、米沢ブランドの高級絹織物として輸出一色となり、ナイロンが開発実用化されるまで続いた。この米沢ブランドの絹織物は、もとはといえば、上杉家の産業振興策から、端を発している。9代目藩主上杉鷹山公

宮崎高鍋藩から、祖母の実家である上杉家の養子となった。当時の米沢藩の、財政は極端に悪化まさに、破産寸前の状況であった。5代将軍徳川綱吉の時代、元禄文化花やかなりしころ、平和なれた武士町人たちは、何事も贅沢な風潮が蔓延した。どこかの国のバブルのようなもの、働かず、遊ぶこと、金を使うことに精をだし、田畑の手入れを怠ったツケガ、5代将軍徳川吉宗の時代の1736年享保の大飢饉、続いて1782年天明の大飢饉、各地で飢えた下層階級の米よこせ騒動、一揆が頻発した時代であった。米沢藩もご他間にもれず、働かないで食べることに専念した藩の侍をはじめ、一部裕福な商人などが、実験を握り、年貢の取立てを厳しくし自分たちは働かず、こんな有様であった。

このたるみきった米沢藩に乗り込んだ9代目藩主上杉鷹山公は、数々の困難を克服して米沢藩を再建した。それは、大儉約令を布きムダを一切省くこと、更に、学問をせよ、そして最後に、産業の振興を実行した。そのなかの一つに、絹織物の一貫生産である。続く

まず、絹糸を創るのは生きたお蚕様、お蚕様の食べるのは桑の木、お蚕様はさなぎから生まれる。さなぎは、大きくなってお蚕様になるには、桑の葉が必要として、農家に桑を作るよう指令を発した。桑の木は幸いやせた土地での十分に成長するので、田圃や、肥えた土壌の畑を潰すことなく、荒地の開墾で桑畑が出来た。つぎは、お蚕様を育て、絹糸をお蚕様が吐き出して繭をつくる蚕棚のある小屋、今で言う繭生産工場というべきものだ。これで繭が出来た。次にこの繭をほぐして絹糸を作らねばならない。ここで、繭をお湯で煮てからほぐす糸屋が必要だ、糸屋さんの工場をつくる。糸が大量に生産されると、今度は糸を、様々な色に染めなければ、それこそ七色の糸が必要になる。美しい絹織物はできない、そこで、染屋さんが必要になってくる。次は染め粉を作る人が必要、このように次々と関連お仕事が広がっていき、最後の織屋さん、そして、これらの美しい絹織物を全国に売りさばく商人が必要、大元締めのお問屋は、織屋から出来たものは全て買い取り、商品別に小売店に卸す、更に小売店は、行商に卸して全国に販売する。江戸表の、大問屋に卸す商売も必要になる。なんととっても、之だけの原料から商品までの、搬送流通のしごとも重要だ。お金を融資する金貸し言葉が悪いな、札差が必要。口入やなどとなり、それぞれの段階で雇用も発生し、お蚕様作戦によって、米沢藩はよみがえった。9代目藩主上杉鷹山公の産業振興策である。実行に当たっては、「何事もなせば成る」の精神で実行した。米沢市内の上杉神社の境内には諸侯と並んだ鷹山公が祭られている。上杉神社は、米沢観光目玉であり必ず観光バスが立ち寄るところだ。

今は100年に、一度といわれる大不況だ。景気回復の主役自動車は、アメリカビッグスリーの凋落、ぶりが代表されるように、これわとといった産業が見当たらない。

いまこそ、人類の叡智を結集し上杉鷹山公の産業振興策を見習って危機打開に全力をあげれば必ず途が、開ける。続く

米沢から、不況突破のヒントを貰った。先ず米沢の駅に降りて驚いたことには、どこをむいても「天地人」一色である。ゴールデンウィークのこの時期には、毎年上杉祭りが開催され、甲冑武者行列、市内を流れる松川の河原で、上杉、武田の川中島の合戦そして、上杉謙信と武田信玄の大將同士一騎打ちなどだ。もともと、上杉ゆかりの地上杉神社、松岬神社、上杉廟など歴史のある土地柄だ。しかし、今年は一段と熱がこもっており、なんとしても、直江兼継のご威光、上杉家のお力を借りて米沢を盛り上げたい、そんな、意欲が強烈に感じた。伝国の社「米沢上杉博物館」では、平成21年1月～22年11月まで一年と10ヶ月にわたり、「米沢 愛と義のまち 天地人博」と称して上杉にまつわる展示が行われている。私も、視察したが実によく出来ており当時の上杉家の立場と時代背景がよく理解できた。土曜日の午後の雨のなか、大型観光バスは駐車場いっぱい、場内は大勢の見物客でにぎわっていた。タクシーの運転手に聞くと、例年上杉祭りには、米沢人口と同数の、9万人が訪れる。今年は事前の調査で、30万人の人出が予想されるとのこと。川中島の合戦には、7千人分の栈敷を用意したとのことである。町の人、お店の人、全て「天地人」「愛の前立て」お土産にも、マスコットにも「天地人」が使われている。全市をあげて「天地人」一色である。米沢人は、この不況をなんとしても、ご先祖の威光を拝借して、盛り上げようとしている。たいした根性とお見受けした。之に比べて東京オリンピック招致活動の、盛り上がりの無さはなんだろうか？東京人はもっと、頑張らねばならない、米沢人のつめの垢を煎じてはと思う次第だ。事を成すには、何事も、成し遂げようとする熱意が大前提だ。心して、先ず成し遂げようとする熱意と、熱意を冷ますことなく、成すまで、継続することだ。米沢人に学んだ不況突破のヒントである。 終わり

150号 細田の歴史ー1

ルーツ

細田木材のルーツは、創業者であり先代社長の、父細田 三郎が、兄伊東主税が経営の、塩浜木工所、今の平住製材工業（株）で修業を終え、昭和6年11月3日独立した。



最初の店は、城東区砂町（現在の江東区南砂）仙気稲荷裏にある九尺2間の借家を、自宅兼店がわりにしていた。祖母かつ、祖父美三郎を引き取り、生まれたばかりの私と母を抱え、文字通り寝る間も惜しんで働いた。いとこの細田正三さんが唯一の店の者、今で言う社員として住み込みで父を助けた。



私は、製材所の威勢の良い、鋸で木材を挽く音を聞き、オガ屑（木材の挽き粉）を吸って大きくなった。中学生の時代から 家業の製材工場を手伝い木材のイロハから教えられ、働くものの心得を、その精神を叩き込まれた。

江戸時代に隅田川の東の地、深川に「木置き場」を作ったのが、「木場」のはじまりだ。いらい日本一木材の集散地として栄えた。昭和51年に「新木場」へ集団移転し、今日におよんでいる。 その昔の「木場」の時代から今日の「新木場」の時代まで、今年で足掛け79年が、細田の歴史だ。

151号

細田歴史—2

人の嫌がる落葉を挽いた

独立後、大横川沿いの吉橋製材所（細田木材発祥の工場）を賃挽き荷主として使わせてもらった。サハリンの赤松丸太、当時の木場言葉で、沿海州の落葉松丸太が土台角用として大量入荷し、お荷物になっていた。当時の木場は、土台角では、杉桧などの内地材が幅を利かし、地挽のドビシャリで重く、狂いやすく、ヤニ強く、担ぐとヤニがベッタリつくなど、こんな扱いにくい落葉土台などは見向きもされなかった。一方地挽屋も、ほかに、エゾの板割り、垂木、割り物など楽しんで、しかも儲けもそこそこ、挽く丸太が、いくらでもあり、強いてこんな儲けからず、扱いにくいものは、誰も手を出さなかった。創業者細田三郎はここに注目、人の嫌がるものを、扱って、世の中のために貢献しようとして、落葉を挽きだした。

落葉は半分がしもり丸太、しもりとは沈木丸太のこと、これも木場言葉だ。このしもりを扱える筏やさんは、水面ですぐに沈む丸太を手早く、いかだ組できる腕利きの川並衆だ。浮き木と称して、浮き丸太を並べ、荒縄で締め上げ、船底のように固める。この上に長さをずらしてかぶせるように積み上げていく、ぐずぐずするとしもってしまう丸太を、鉤つきの長棹で、引き寄せ自由自在に、積み上げていく、惚れ惚れするような腕前だ。ときには、木積み唄の、木遣りが入り情緒ある木場の光景だ。余談だが、現在、深川富岡八幡の境内に、木遣りの記念碑が建ち、深川木遣り保存会として、お祝いの席などで木遣り唄を披露している。続く



152号 細田の歴史—3

落葉土台角の製材

カネ東は、落葉の中目丸太から、土台角を製材した。創業者細田三郎は創意工夫の精神が強く、常にモットよい方法はないかと考えながら仕事をしていた。人に勝つには、並大抵のことでは勝てぬ、しからば、どうするのか、人の何倍も働くか、人と同じ時間働いて、人の何倍の仕事をするかどちらかだ。

人の何倍働くのは短期間なら出来るが、長期間はムリ、となれば、人と同じ時間働いて、何倍の仕事をするのが、正道とばかり、どうすれば、何倍の仕事が出来るかを、必死に考えた。いくつかの成功例があるがここでは、この時代、落葉中目丸太の製材での工夫を紹介する。中目とは末口五寸から、九寸までをいう。製材寸法は、すべて三寸五分土台角一本やり、ほかにも三寸三分、三寸、二寸五分などの種類があったが本日は、三寸五分角以外は挽かない製材しないと決めた仕事だ。ここがえらいところ、昔から「製材は木に倣って挽け」が大原則とされているが、これは高い原木を挽くときの話、落葉など安物を挽くには、大量生産でコストを下げるしかない。しかも有機物一本一本違う太さ曲がりなど硬い柔らかい節あり無節、割れ腐れなど欠点を一々考えながら仕事しては、陽が暮れてしまう。太い細いや、歩留まりには眼をつぶりとにかく単一生産三寸五分角一本やりで製材した。とにかく、三寸五角だけ、というやり方に徹した。こうすれば、作業者は、余計なことを考えず、丸太を台車にのせ、「本木」木取りに固定する。三本マストの寸法は、うしろの三本目が定規だ。この寸法は、三五、二丁取りプラス鋸道＝七寸一分とし、この定規マストは、本日終日固定としハッカを打つのみだ。一番マストは、丸太に鋸路に合わず。二番マストは、ただ丸太が動かぬように固定する補助マストとして一つ下げ、ハッカを打ち込み固定するだけだ。

この方法に徹すれば、分だし屋は丸太の七寸一分だけだせばよい、ここは素人でよいことになる、ここにも創意工夫があり味噌もある、ハンドルやは、物指当てずに、一心不乱に押すのみだ。

こうすることにより、いちいち物指を当てて図る時間が節約、他所の工場よりも、コストを下げる事が出来た。一度固定した定規は動かさない。ここが創業者の偉いところ正に創意工夫の最たるものだ。いまは、このような創意工夫があるだろうか？合理化され、分だしも電気分だし、ハンドルも自動化されて、仕事は楽になり、能率もたしかに、上がったが、しかしどうなのだろうか？なにごとともそうだが創意工夫がなくなった。100年に一度の危機などといって、甘えていないか？まだまだ創意工夫の余地は十分にあり工夫したものが勝ち残りことになる。当時を回顧しての教訓である。続く

153 号細田の歴史—4

丸太はひっかけ筏とポンポン船

木場うちの丸太は、いかだを組み、エンジン付の曳きぶねで引っ張っていた。これは今でも変わらない。昔は、小丸太が多かったため、浮き丸太を荒縄で縛り上げ、ダルマ船の船底のように一枚板の筏を固める。この上に、長さをずらして、子供が親におんぶするような形で、しもり（沈木）丸太をおんぶし、筏を組み上げていく。

このおんぶは大きな筏で10段積み～15段積みのいかだが出来上がる。この筏を、ひっかけ筏という。小丸太、特にしもり半分の落葉松などは、この筏組が100%だ。この筏組をひっかけ筏という。

ひっかけ組みの仕掛けは、穂先に川並専門の鳶口をつけた長さ2間の竹竿を操る川波衆が鳶でひっかけて、丸太を次々おんぶさせていく、人間が人間をおんぶするように丸太を積み上げていく、このおんぶの上に、長さをずらして、更におんぶを繰り返す、このおんぶを、10回から15回繰り返し一枚の筏とする。

長さ30尺中目7寸丸太15本並びを10段と計算すれば、ここからは、ラフ計算、計算機など使うなかれ、 $1.5 \text{ 石} \times 15 \text{ 本} = 22.5 \text{ 石} \times 15 \text{ 段} = 337.5 \text{ 石}$ となる計算だ。この筏一枚が337.5石だ。

これだけの数量の丸太を、木場の川並衆が、筏組という技術を使って運搬しやすいように作り上げ、この筏を、わずか15馬力のポンポン船で曳き、木場じゅうを水面が縦横に走る河川をわが庭として自由自在に異動した。今で言えば、トレーラ4台分の丸太を、ポンポン船で一気に曳っぱっていく、正に省エネ、省力の極致だ。



154号 細田の歴史—5
製品の運搬はダルマ船が一番

そこで一度に、百石積みのダルマ船が運搬の主役であった、木場の製材所はもちろんのこと問屋はほとんどが木場の川筋に集結しており、この理由は荷揚げが楽にできるからである。

川岸に、もやった伝馬船に歩み板と称する足場板を渡す、それも行きかえりの往復で二枚いる、この板をわたりながら荷揚げし林場に立てる。荷揚げ専門の人足という専門労務者が1石いくらかで請負運び上げる、



この仕事も大変な重労働で、赤の6尺ふんどし一丁に肩当だけの裸姿で威勢良く歩み板をわたる姿、これもまた勇壮な男の仕事、人間と荷物の重みでしなう歩み板の上を掛け声をかけながら調子をつけて歩む姿も木場ならでの勇壮な男らしい姿だ。

私も経験があるが、なれぬと歩み板から足を滑らして、川の中へ落ちてしまう危険な作業だが、なれると、こんな男らしい仕事もほかにはざらにないのではと思った。

潮の干満によって歩み板の角度が変わる、引き潮になれば船の高さが下がるので角度が急になる、上げ潮になれば段々上がって角度が緩やかになる。それと荷が減れば船が軽くなり浮き上がってくるために、引き潮のときに荷揚げすればバランスがたもたれ常時水平に歩み板を保つことができることになる、これが理想的な荷揚げだ、

後先になったが、船底からげん側まで、もう一枚または二枚になるか歩み板がいる、極端に言えば船底の底一番下になると、船の中には二枚の歩み板が必要になり、この歩み板を上るだけで大変な重労働だ、まして目いっぱい担げるだけかついでの荷揚げは、想像を絶する重労働だ、

比較される佐賀町倉庫街の米俵の荷揚げも、力自慢が集まって米俵を担ぐが、米俵は大きさ、姿かたち、重さも一定なので担ぎやすいが、材木は千差万別だ、こちらのほうが扱いにくし作業も大変だ、しかしこれも木場の名物、風物詩として紹介しなければならないことのひとつだ。

昭和25年朝鮮動乱が発生し、木場も漸く活況になった。このころ木材の輸送手段としては、馬に馬方、筏に川並、伝馬船と船頭などが主力で、この三者は木場にとってどうしても必要なものであり、また木場の象徴として「絵」になる風景でもあった。

陸上は馬車が主力、当時の木場には馬車は千台あると言われた。馬車一台に木材を約10石積んで運搬していたが、馬は力が強く、平らな道ならわけなく引っ張っていたが、深川の橋は、周囲の地盤沈下によって、急斜面の太鼓橋となっている、この坂が、馬にとって最大の難所だ。



馬方は坂の下から威勢を付け、馬も気合を入れてサアヨシと、人馬一体となって、一気に駆け上がる、一直線ではなく、いわゆるスイッチバック方式でジグザグに登るが、急な坂ではスピードが落ちてくる、途中で止まると、そのままずるずる後ろへ下がってしまう、そんな時はまた坂の下からやり直しする大変な仕事だった、口から泡を吹き力尽きて、倒れこむ馬もあるほど、難行苦行の上り坂である。

私は子供心に、馬が可哀そうだ、このままでは死んでしまうのではとハラハラしながら見ていた。後ろから押してやりたくてそばに行くと、気がたっている馬方に、「子供は危ない邪魔だ」といって追い払われた。

馬方は手に鞭をもち、ソレッとばかり、自分も一緒に走りだす、まるで自分も馬になったような形相で一緒に走る、馬はひづめの蹄鉄が、道路の石を削って、カッカと火花が散るなかでまるで、ライターのようなのだ。

馬方の掛け声、火花を散らし、走るひづめの音、馬方の掛け声、鞭の音など、人間と馬が一体となって坂道に挑む姿、正に感動の一言に尽きる、素晴らしさ、美しさを醸し出している壮大なドラマである。

やっとの思いで坂道を征服した時の姿も、さらに大きい感動の世界だ。馬をとめ、馬方が馬に餌を与えながら、馬の体の汗ふき「ようやった」と、馬の苦労をねぎらっている姿もさらに美しい感動であった。

感動は三つある、

一つは坂道を駆け上るとき、

二つ目は坂を征服した時、

そして三つめは、最後の体をふきながら「ようやった」と話しかける姿だ。千石町には、福寿橋、三国橋、大栄橋、石住橋などが大きい橋だ。この橋に登る人と馬との共同作業、実に感動的なシーンであり子供心に焼き付いていまでもはっきり覚えている。

156号 細田の歴史-7

木造住宅強制撤去

私が千石町にお世話になったのは昭和15年小学校2年のときと記憶している。平野町から引っ越してきたので、通学区は明治小学校に通っていたのでそのまま、千石町から明治小学校に通った。

戦争が激しくなり、米軍のB29爆撃機が落とす焼夷弾、東京は木造住宅の密集地、焼夷弾が落ちれば火の海、関東大震災再来の大惨事必至だ。

そこで、木造住宅密集地の取り壊し、いわゆる強制撤去が始まった。記憶が正しければ、大門通りの東側、扇橋小学校の北側から、清洲橋通のあいだの地域が強制撤去の対象になり、空が暗くなるほどの埃をもうもうと上げて、木造家屋が取り壊されたのを今でも鮮明に覚えている。



創業者細田三郎は、明治39年1月1日に生れ、大正12年関東大震災の直後、17歳で青雲の志を持って上京、東京深川の、叔父伊東広十郎氏の経営する塩浜木工所に奉公入りした。甥、伊東龍男の生まれた年である

関東大震災直後から昭和の初めにかけての木場はどうであったか？ を検証する。大正12年9月1日に発生した関東大震災は、死者行方不明者10万5千余、家屋倒壊10万9千焼失家屋21万2千、被害総額当時の国家予算の1年4カ月分に相当すると記録されている。

大正時代の木場は、大正3年（以下大正を略）欧州大戦（第一次大戦）が勃発、木場への木材入荷は明治末期に比べ倍増、造船用の米松材が大量入荷、そして南洋材の輸入が始まった時代だ。

7年大津波の影響で木材価格大暴騰した。8年には東京木材市場設立、取引の単位を尺締めから石取引に変更などがあり、木場の景気はピークの時代であった。

その後、第一次大戦が終結し、反動で一時業界は、沈滞したが、10年11年には、持ち直し、総合商社三菱商事、三井物産、大蔵組などの米材輸入が増大、取引が活発化した。

12年の関東大震災後の復興需要急増、全国から木材業者終結し、震災前に比べ問屋は倍の450、製材工場300、仲買1000店となり、一大ブームとなった。

しかし、わずか一年後の13年には相場が大暴落倒産廃業など、短期間で変動波瀾万丈の時代に、創業者細田三郎は、17歳正に青雲の志をもって木材業界に飛び込んだのである。

大震災景気から、一転大不況で倒産廃業あいつぎ、木場の製材工場では、中小工場が廃業に追いやられた。塩浜木工所は合理化努力により、この危機を乗り越えて、大震災後の復興需要に繋げることができた。この時期 17 歳で、丁稚小僧として入店した創業者細田三郎は、水をえた魚のように、力いっぱい働き、昭和 6 年独立した。

一方木場取引を支える銀行が進出した。現在の三菱東京UFJ銀行の前身、東海銀行が、大正 8 年 10 月 10 日、名古屋銀行日本橋支店の、木場出張所として開設した。

当時の表示は、東京市深川区木場町 8 番地、現在の、三つ目通りから西へ鶴歩橋に向かう通り、東は、平井町から南砂町に抜ける木場のメインストリートである。

当時は、中小の銀行が数多くあったが、景気変動の荒波に耐えきれず倒産した銀行もあった。

このような変動期に開設した経緯は、木場の有力業者、長谷川万治様、長谷川木材様、西林銘木様などの方々から、日本橋まで行くのは不便、木場に銀行を、是非とも、との強い要請で、木場出張所を開設したとのこと。

第一次大戦終結後の反動で木材業界が混乱し、難しい時期に、木場の金融に正常化の道を開いたことに、業界の後輩として、心から感謝申し上げます。

独立してからの創業者細田三郎のことについての詳細は、151号、152号ですでに述べたが付け加えると、単価の低く、しかも重く、ヤニがつく、いといこ無しで、人が嫌がる沿海州の唐松の土台角専門に製材した。

工場は、大横川沿いにある吉橋製材所で、いわゆる地挽き屋である。創業者細田三郎の曲がったことが大嫌い、正直で真面目な性格を生かした商いをした。

木場うちの間屋から、明日は何本出せるかと、出荷員数の問い合わせがあるほど、カネトウの土台は好評であった。

ところが、独立してから数年後に、樺太材保護のため、林政改革が実行され、木場うちの業者は、内地材転換を余儀なくされた。

カネトウでは杉、檜、松などを製材したが、これに飽き足らず、どうせやるなら高級材をとの考えで、最高級の木といわれる木曽檜に挑戦した。ところが、木曽檜は帝室林野局管轄であり、有資格者のみの入札制度であった。

有資格者とは、貴族院議員の選挙資格者即ち、多額納税者である。しかも支払は国債をもってすると決められていた。残念ながらカネトウにはこの資格なく、人に頼んで手に入れたのである。

木曾檜の丸太をやっこの思いで手に入れたはいいが、落葉松専門のカネトウでは、高級材を挽く知識がない、一発鋸の入れ方を間違えたら、儲けが飛ぶどころか、大損するこんな高級材をカネトウでは、とても、挽けないので、向岸にある吉地製材さんをお願いし、挽いてもらった。

ご当主は、高級材に詳しく、特に木曾檜の隠れ節を見別ける名人として、木場うちでも一二を争う眼力の持ち主だ。

お願いして教えを請い挽いてもらった。御蔭さまで、カネトウは木曾檜の柁平を、値打ちで木場うちの問屋に買ってもらうことができた。

このころから、製品も多様になりスギの垂木、板割、松の平角などを製材し店員も増えた。

昭和10年から東北近県材に手がけ、山形県の米沢に支店を設け、重役と、丸太の集荷を伊藤倉蔵氏（私の仲人）をお願いした。その時の宿が 羽前小松駅前にある菊池正一郎氏の生家米屋旅館である。

続く

